

# ドーデ『タルタラン・ド・タラスコン』 の模作について — タルタランの息子 —

加 藤 林太郎

## 1

ドーデの「タルタラン三部作」にはいくつかの模作が存在する。前稿においては、三部作の主人公タルタラン本人を再登場させた模作について考察した。『タルタラン戦場へ行く』<sup>(1)</sup> (1919) は第一次世界大戦にタルタランが志願して出征、輸送部隊で苦勞する物語である。『タルタランの回想』<sup>(2)</sup> (1920) は、世に伝えられる滑稽人物タルタランを、本人が回想記で以て修正するというものである。『オーベルニュのタルタラン』<sup>(3)</sup> (1926) は、名狩獵家タルタランがオーベルニュ山地を訪れるのだが、現地で悪意ある対応に直面したり、盜賊騒ぎに巻きこまれたりする。これらの「模作タルタラン」に共通して見られることは、タルタランの故郷の町タラスコンの存在感が原作に比べ格段に稀薄なことである。原作においては、タラスコンは単にタルタランの現住所ではない。タルタランの嘘が現実と肩を並べるに至るのはこのタラスコンという「嘘つきの樂園」においてなのである。しかし「模作タルタラン」は単にタラスコンを欠くだけなのではない。そこにおいてはタルタランはもはや町の空想家ではないからである。新タルタランは原タルタランの欠点を保ちながらも、今や南フランスの偉人なのである。彼の誇大妄想も虚栄心も冒険の失敗も偉人の業績の中で帳消しとなってしまう、原作における様にタラスコンの町で榮譽へ反転される必要はないのである。タラスコンの欠如は釣り合いと埋め合わせを見出したわけである。

本論においては、模作の中からタルタランの息子などを主人公にしたものを取り上げる。つまり「タルタラン模倣家」の考察である。原タルタランがすでに模倣家であって、それぞれ狩猟家、登山家、開拓者の模倣にはげむ人物であるのだから、2代目タルタランなどは、滑稽人物の一類型である「模倣家」のさらに亜種に分類できるのではないだろうか。

## 2

マリユス・ジュヴォの『タルタランの息子』<sup>(4)</sup> (1906) は一幕の劇である。2代目タルタランは同じタラスコンの町で砂糖菓子製造販売店を営む40才の男で、店には18才の見習い職人ロジェがいる。太っちょの2代目タルタランは店の中を興奮して歩きまわりながら冒険旅行に憧れる詩句などを口ずさみ、荒野の征服者たる父を賛美している。父親ゆずりの冒険願望にさいなまれているわけで、娘さえいなければこの木さじを小銃に持ち代えて…などと口ばしりつつ椅子から勘定台へと登るが、シロップが煮立ったことを告げに来たロジェの声に夢からさめ、仕事にかゝる。そこへ娘アノンシアードの恋人で執達吏見習いのポールさんが結婚の申込みにやって来る。隣町より遠くへは行ったことのないようなひよわな小役人は婿におことわり、英雄の血がうすまったらどうすると2代目タルタラン。良い考えが浮んだと見えてポールさんは勇んで出て行く。店員のロジェ（実はポールの恋文をアノンシアードへ届ける係り）相手に二人の様子などをたずねているところへ羽根飾りをつけたインディアン（実はポール）が登場、店を恐怖におとし入れる。「パパガイ・マタマ…（はだか馬にまたがり、鳥よりも速く）」などと叫びながらタルタランに投げ縄をかけ、「頭の皮はぎ」か「串刺し」かどちらがよいのだと迫る。「もうだめだ…娘よ…」とタルタランが叫ぶと、なに娘がいるのか、白人娘と結婚するために海を越えて来たのだ、スー族の男は「ミルクの色の顔、空の色の眼」にあこがれているのだ、とインディアン。なに、ポールさんという恋人がいるだと。それを先に言わぬか。その男とお前の娘が結婚するのを許すならば、おれは手を引いてもよ

い。はやく彼らと呼ばびに行け、とインディアン。もとの姿になって戻って来たポールさんを、タルタランは満足気に抱きよせる。

原タルタランも実は空想的英雄主義のブルジョワにすぎないけれども、『タルタランの息子』の2代目タルタランは製造販売業を営み、より足が地に着いているだけに父とは皮肉な対照をなしていると言えよう。しかしその空想的英雄主義は今や悪性遺伝と化して2代目タルタランの頭を曇らせているのである。さらに対照的なのはタルタランの方には生活の自由があったことである。本人は我が家と我が町を離れる気はないのだが、不幸な虚栄心や野心にそゝのかされて見ず知らずの土地へ冒険旅行をこゝろみる。つまり望むまゝに長期の留守が可能だ。製造も販売もせねばならぬ2代目タルタランはそうは行かない。そこで「冒険」の方から店へと飛び込んで来る。即ち、一幕のうちに全タルタランが圧縮されうるのである。物語はいわゆる「難題婿」に分類されるのであろうが、婿志願者のポールは、恋人の父の冒険願望を逆手に取ったわけである。モリエールの『町人貴族』などで若い恋人たちが狙う解決法に近い。インディアン登場というのはタルタランの冒険では目新しい。もっとも、タルタランはクラブへの往復にタラスコンの夜の街路を通過することを余儀なくされる。そしてそこでの漠然とした恐怖を擬人化した「あ奴」に出会わすことになっているが、そのイメージはほぼインディアンの戦士であるから、その「あ奴」が2代目タルタランの前へついに出現したのだとも言える。台詞は古典劇を模してアレクサンドランで以て述べられ、パロディのおかしみを増加させている。

### 3

ルイ・ド・スーダックの小説『ロシアにおけるタルタランの息子』<sup>(5)</sup> (1905)では露仏同盟締結にともなう仏大統領のロシア訪問の裏で、タルタランの息子がそのパロディを演じる。

1897年の2月のある日、フランス人作家「私」はペテルスブルグのエルミ

タージュ美術館でリセ時代の旧友でフランスの貴族女性と結婚したフェディア・ポルタウスキー公に出会い再会を約して別れる。坂道を暴走して来た馬車が倒れ、負傷したフランス人を介抱することになる。「ロシア万才！皇帝万才！」などと叫ぶこの人物が実はタルタランの息子で、はやくも腹の出た三十男である。本人は重傷の気で、「私」に回想録の原稿を託する。この回想録から、南仏の名物男タルタランの晩年とその息子がロシアへ来た理由が知られることになる。我が家の歴史を子孫にという思い入れの回想記であった。

スピリディオン・ドジテ・タルタランはタルタランとロシア貴族の女性アヌーシュカとの間の一人息子であり、母は出産後死亡した。自分は父の従妹ヴェロニックにあずけられる。アヴィニョンのイエズス会の学校に在学中に父タルタランが死去、全タラスコン人がはじめてローヌ河の橋を渡ってボーケールでの葬儀に参列（仲が悪い町である上、橋の途中で強風ミストラルに吹き飛ばされるのがこわい）した。パスカロン（タルタランの腹心のベジュケの薬局で徒弟として勤めていた男）の姪クレマン・ルビュフェに恋する。出世主義偏重の学校を去って友人エスピナスと父の旧友の公証人の見習いとなるが、クレマンに許婚者がいるのを知って失恋。かたわら文学修行を開始、パリへ出て詩集を自費出版するが不成功におわって帰郷する。政治へ方向をかえたエスピナスから地方新聞「カピトル」に関係、大小の政治家とつき合ううちに雄弁の才能に目覚める。クレマンにもう一度迫って平手打ちを食ったことから、政治へ向う決心がつく。

立会演説会で代議士バラフォールの応援演説をたのまれて檯舞台をふむことになる。雄弁で鳴る相手代議士に対抗させようというのである。こちらの代議士は、ニームなみの競技場とモンペリエなみの大学をタラスコンにも…という雲をつかむような政見を有するのである。相手代議士の雄弁に自分まで説得された上、相手方秘書に苦手の旧友がいて、散々に毒づかれて意気阻喪してしまう。演説は腰くだけとなって、「アヌーシュカ」などとやじられるが、南仏の騎士道精神の華、父タルタランを引き合いに出して逆転劇を演じ、北極を溶かす噴火山とたたえられる。この人気でかつての詩集が売れ始めたりする。バラ

フォールを見放してタルタランを代議士にする陰謀がもちかけられる。仏露友好のため予定されているフォール大統領の訪露の地ならしにペテルスブルグで活動し、その実績で代議士に出馬するとよいというのである。ドイツに知られぬよう海路乗り込むことになり、かくてフランス熱に沸くロシアへと旅立つ。クレマンスは離婚後行方不明となり、クレマンスの父は亡くなるといった悲報をあとにマルセーユ港へ到着。嵐で海難事故が伝えられ、コンスタンティノープルでは不穏な事件も起っているので警戒して断念、政敵にあざけられぬよう海路をよそおって列車でドイツを横断することに変更する。海路旅行の見せかけの記事を新聞には送る。この旅の回想記を残し、かつ憧れのロシア女性と結婚することを夢見つつ列車で再び北へ向う。列車が戻って来たタラスコンで乗り込んだ人たちの話から、友人のエスピナスが、自分の立候補の邪魔ものとしてタルタランをロシアへ遠ざけたのだという噂などが耳にはいる。

「敵地」ドイツを通過してロシアへ入国。仏語を話す税関の仕官が「タルタラン・ド・タラスコン」の名を知っていたのに気を良くするが、武器を大量に携行していたため税金を払わされる。駅でチップを撒き散らしたため美しい車室で一人旅となる。室内の高温と車外の厳寒とで悪い風邪を引き込んでしまう。ペテルスブルグへ着き、ホテルで医者に診てもらうが、外出を禁じられたため、退屈しのぎに回想記を開始、嵐の航海についての記事を新聞へ送る。厚着で初外出し、ネフスキー大通りを冬宮へ向えば、陽気で雪どけである。相手が士官なら仏語で道がたずねられる。冬宮はタラスコンの町ほどの広さがあることに感心。訪ねて来た同郷人らとウォトカで酔い、ロシア在住のフランス人の噂に花が咲く。ロシア人のフランス好きをいいことにして低級な仏人が国の面よごしになっている。ただし「パリ人」でないと尊重されず、スイス出身の女がパリジェンヌと称して家庭教師をつとめている。一方ロシアの貴婦人はパリで羽をのばすのだ、などなど。皇帝の馬車に「皇帝万才」と叫んでかけ寄ろうとした一事が、「皇帝に会見」の記事となって送られる。回想録はこゝで一旦中断するが、南仏の偉人の息子が気に入ってしまう。

フォール大統領の訪露確定のニュースが出る頃、「私」はフェディア・ポル

タウスキーとの食事の席でフェディアの友人ボリス・バラトフと会う。事業妄想家で、コーカサスの森事件で破産したのにこりず、今度はクリミアでぶどう園を計画している。ロシア人を有害なウォトカからワインに宗旨がえさせるのだと言う。まるでロシアのタルタランだが、そのタルタランの息子が来ているのだ。「私」はボリス、フェディアとつれだち原稿を返しにタルタランをたずねる。貴族の訪問にあわてるタルタラン。大言壮語のタルタランとボリスは馬が合う。仏露友好の擬人化だと感心。フェディアの案内で冬宮を見学する。玉座と王冠に感動するタルタラン。その夜フェディアに招待され南フランス出身の夫人に会うことになる。「冬宮に招待さる」と新聞へ電報を打つタルタラン。

その夜フェディアの夫人に紹介されておどろく二人。夫人はあのクレマンسだったのだ。がぜん秘密をにぎる立場になったタルタランは、「回想」の読者たる「私」にだけ真相を打ち明ける。ロシアをくさし、フランスばかりほめるフェディアの母やパリ人と称するスイス人の仏語教授。立食の席で農奴解放後の問題やロシア語優越論などが展開される。フランス女性の権利の低さへと議論は進み、タルタランの心配をよそにクレマンスが大胆な告白を行う。貴族の称号につられて結婚した乱暴な男と別れたこと、パリで知り合ったロシア貴族と結ばれたが、フランス人には見られない進歩的な思想と教養におどろいたこと。フランス女性はロシアへ来て解放されるのだということが分る。タルタランのおこなった仏露友好の演説が喝采を受け、ラ・マルセイユーズが奏される。一方タルタランはフェディアの叔父の將軍の養女オルガに恋し始める。ピアノ、歌曲の後に舞踏が始まり、タルタランはオルガと踊って大はしゃぎをする。

ボリスのクリミアへの出発を見送ったところへタルタランがかけ込んで来て、愛するオルガが異父妹だと判明したと言う。フランスでは私生児は偏見から冷遇されすぎるが、自分もそうだとオルガは言う。戦死したロシア軍士官とマルセイユでやとった小間使いの間に生れた娘。アルバムを見せられタルタランは仰天。さらに、有名人との間に子供があったと聞かされ、自分の母親だと判明したのである。

パリにいる「私」へのフェディアの便りでその後のことが知られる。遺産横領事件に利用されてボリスが逮捕されシベリア送りの可能性もある。ペテルスブルグは仏大統領歓迎のフィーバーが高まっているのにタルタランは行方不明。そこへタルタランの獄中記をあずかった学生があらわれる。三月から八月まで獄にあったのだ。獄中で焼身自殺した女子大生の事件を皇帝に知らせようという学生デモに巻きこまれたもので、フランス人と分って胸上げされたため主謀者と間違えて逮捕されたのである。父がアルプスで起こした虚無党事件が警察に知られており、さては一味かと疑われる。八月半ばまで留置されたあげく、釈放される学生に通信を託したのであった。フォール大統領訪露は明日という日にぼろ服で一文なしのタルタランが釈放されて出て来る。ところがこれがタルタランの見おさめになるのである。

パリへ戻った「私」へ届いたルアーヴル発の手紙でその後の消息が分かる。大統領がロシアを去る直前、仏露水兵の宴会場で演説をぶち、「フランス万才!」と乾杯し胸上げされたまではおぼえているが、翌朝水兵の服を着て目覚める。水兵が服をとりかえて脱走したのだ。タルタランは大使館の命令でルアーヴルへ護送された。フランス側の警官に南仏出身者がいて、エスピナスが代議士に当選したことを知らされる。軍事法廷で注意を受け釈放となったタルタランは、文なしで欧州をはなれる。手記の処置は任せると言う。それでもやはり「フランス万才、ロシア万才」という結びの文句。その後受け取った手紙はカナダのドーソン・シティからであった。アメリカ行きの船を港で見かけ、シベリア送りを赦免されたボリスと落ち合って二人でアメリカへ渡った。ドーソン・シティで人々が退屈しているのに目をつけコンサートを計画、ボリスのピアノ、タルタランのテノールヘカナダ人のコーラスを加えたグループを結成。二人は似ているということで「タルタラン兄弟」と呼ばれている。天の配剤かアラスカで仏露友好の実をあげているというのである。

タルタランとロシアは無関係ではない。『アルプスのタルタラン』において、タルタランの無邪気な登山を迷走させた原因は同宿のロシア虚無党の男女グループ、中でも將軍暗殺犯の金髪の美女ソニアであった。ユングフラウを目の

前にしながらタルタランがぐずぐずし、故郷から旗を押し立てた広援隊が乗り込まざるをえなくなったのも、このロシア娘に恋を打ち明ける機会を待っていたからである。しかし『ロシアにおけるタルタランの息子』の作者はスラヴ諸国にくだしい人らしく、同じロシアでも背景の規模が格段に大きい。露仏同盟が締結され、フランスからはフォール大統領がロシアを訪問したが、その前後の仏露友好の国際的雰囲気がこの『ロシアにおけるタルタランの息子』の背景である。従って全篇を通じてくり返し描かれているのは当時のロシアの甚だしい親仏感情である。これは露仏同盟によってはじめて起こった現象ではなかった。「フランスの小説をフランス人より先に」読み、フランス人でありさえすれば特別扱いする。この様な「フランコフィリー」の環境が2代目タルタランの多弁を助長し、雄弁をうながす。「タルタラン三部作」でもタルタランの南仏的多弁は強調されているが、そのおしゃべりが作中に再現されているわけではない。『ロシアにおけるタルタランの息子』と「原タルタラン」とのちがいはこゝにある。その主人公はタルタランの息子というよりはドーズが造り出したもう一人の南仏男、雄弁な政治家ニュマ・ルメスタンの息子と言った方がよりふさわしい。

## 4

ピエール・デュランダルの小説『タルタランの甥』<sup>(6)</sup> (1914) は『アルプスのタルタラン』の亜流と言える。

ピレネー山麓の村「家鴨ヶ沼」の青年ジャン・サルトゥーは南フランスのかの名物男と何の関係もないが、「タルタランの甥」という綽名をちょうだいし、本人もこれを自慢にしている。トゥールーズの大学を出た村長の息子フィランドルさんは村のましそうな男を集めて取り巻きにしているのだが、脚長のフィランドルの腰巾着になっているのが太短いジャンである。ジャンは仕立屋の仕事もろくに継ごうとしない本好きの青年で、クーパー、エマルル、ヴェルヌなどに中毒している。冒険旅行を願望し、未知の国、ライオン狩り、インディア



ンとの闘いに憧れているのである。そのためフィランドルさんがこの綽名をくれたのである。タルタランの欠点だけを持ち長所はないという位の意味である。

大きな口をきくが実は大した臆病者である。しかし村の人たちは県庁のある町タルブへさえも行ったことがなく、夜の集いでジャンのほら話は人気が高い。愛読書の冒険物語をアルジェリアでの兵役の経験へ組み込み、自分を主人公にしたほら話を作り上げる。村長の息子さんは見て見ぬふりである。

英国の世界周遊家ハンフリー・ブランチャードがジャンの村へやって来る。ジャンの質問には「イエス」と「ノー」でしか答えないが、ジャンの冒険心を見込んで世界一周気球の旅へと連れ出す。そして1ヶ月後に届いたスイスからの手紙でブランチャードとジャンの気球の旅で起こったことがわかる。それによるとジュネーヴで気球を作って空へ舞い上ったらしい。強力な英国の冒険家は夜も地面へは降りないのだ。泳いで世界を一周した人などが名を連ねるクラブの会員だから対抗上も無着地世界一周の賭をしているわけである。牢獄より悪いと不平を言うジャンは着地を要求してブランチャードとの対立が深まって行く。食物も切りつめ、十分あるのはガスのみだ。

ジャンが残りの飲食物を気球から投げ捨てたことで二人は決裂、ジャンをアルプス山中に放り出して気球は去って行く。一文なしのジャンは虚栄心も手伝って帰るに帰られず、たどり着いた山の村で山案内人の一家の世話になり、ガイドを志願する。しかし空よりは安全だと思ったのは甘かったのである。

未経験者は採用してくれないのだが、ガイド一家の息子が同行してくれることになる。かくしてガイド付きのガイドを開業することになるが、その初仕事は英国人父娘の案内であった。ところが客と顔を合わせてびっくり。ブランチャード氏とその娘なのだ。氏はガス発生装置の故障のため気球旅行を断念したものである。ジャンは令嬢の担当となるが、山で強風に見舞われ、エネルギーな英国娘の方がジャンを支えてやらねばならない。転落など散々醜態を見られた上ブランチャード氏と別れる。

ガイド志願に失敗して一人山道を行くと、闇の中を猛獣の唸り声が迫って来

る。武器はアルペンストックしかない。やがて現われた狼はジャンの手をなめ、熊は抱きつく。警官と飼育係が探しにやって来たことから、巡回動物園を逃げ出した猛獣だったことが判明する。

冒険旅行を果すためと、村へ帰る金がないことから一座に入団させてもらい、ライオン、虎、大蛇などと地方まわりを始める。空想力とほら吹き才能を生かして呼びこみ係をつとめる。一座の動物の安全性を山道の一件で身を以て体験しているので、興行地の警察ではたやすく許可が得られるなど座長から重宝がられるジャン。

大入りの動物園で客席から出火。行方不明のジャンがやがて火中から救出される。ジャンは一ヶ月半生死の境をさ迷い、一座は待ち切れずに出発する。残された金で今度は列車で帰郷。さっそく熊と狼を一撃でたおした話が始まるが、フィランドルさんの冷たい視線をあびて初めて大言壮語への反省心が生まれる。今では買った土地をまじめに耕すジャン・サルトゥーだが、冒険話のおわりには「生れた村に優るものなし」とつけ加えるのを忘れない。

ジャン・サルトゥーはその綽名の通り縮小版のタルタランであろう。ただし縮小版であるから本物のように自由気まゝに振舞えない不幸がある。不用意に冒険入門をこころみれば、そこには本物の冒険家や本物の山案内人が存在して厳しい態度を以て臨む。『アルプスのタルタラン』で鈍重なタルタランに手を焼く山案内人たちや『タルタランの大冒険』でタルタランの大言壮語をたしなめるひょう狩りの専門家ボンボネルなどはもちろんこれらの原型であるが、原タルタランではあくまで本物との遭遇にとどまる。だがタルタランの甥ことジャン・サルトゥーはひとり立ちができない「冒険家」である。職業的冒険家の助手か見習いの立場にすぎない。原タルタランは猛獣狩りの名手または大登山家の愚かな模倣家であるけれども、やはり模倣家と見習いの差は歴然たるものがある。「門人」たるジャン・サルトゥーはいわば専門家によって「破門」されるのである。気球乗りのブランチャード氏によって、職業的の山案内人によって。

さらに悪いことにはジャン・サルトゥーの故郷「家鴨ヶ沼」はタラスコンで

はないのである。アルジェリアでのライオン狩りやモンブラン登頂が失敗であったことはタルタラン本人がいちばんよく知っており、故郷の町の駅へ降り立つことを何よりも恐れている。しかしタラスコンへ帰るのだということをタルタランは忘れていたのだ。タルタランの知らぬ間に故郷で彼は英雄となっており、歓呼の嵐の中へ列車から降り立つことになる。三部作のうち『タラスコン港』のタルタランだけが不幸にしてかかる都合の良い結末を持てなかったのは、彼が彼の冒険にタラスコン全市民をつれて行ったからである。タラスコン市民は故郷の英雄の大失敗という現実を目撃せざるを得なかったのである。ジャン・サルトゥーにはこのタラスコンの様な好都合な故郷はない。彼のほら話は大手を振ってまかり通ることが許されない。村長の御曹司が監督係然とにらみを利かせているからである。彼の村はほら吹き楽園タラスコンではないわけである。『タルタランの大冒険』と『タルタランの甥』の決定的なちがいはこれであろう。

## 5

ジュール・ソッティオの『名うてのベジュケのワロニア旅行』<sup>(7)</sup> (1932) では、スペイン人薬剤師夫妻がベルギーのワロニア地方を旅する。

アルカラ・デ・エナレスで薬剤店を営むベジュケ・セルヴァンテスは、パリで医学を学び、丸薬「長命丸」(商売がたきは「短命丸」と悪口を言うが)で大もうけをした。セルヴァンテスといっても<S>ではじまるのだが『ドン・キホーテ』の作者の子孫と信じ、古武器のコレクションを自慢にする人物である。彼の綽名の「ベジュケ」とはドーデの「タルタラン三部作」にタルタランと共に登場するタラスコンの薬剤師でタルタランの忠実な友である。アルカラの町の有名な大学がマドリッドへ移転して町がさびしくなったのを悲しみ、夫人を伴いベルギーへと旅立つ。ベジュケは「カランバ」(くたばれ)などと叫んではドン・キホーテ的性格を旅先で発揮し、夫人をはらはらさせることになる。

夫妻が歴訪するのは首都のブルッセルをはじめとしてアントワープ、リュージュ、ユイ、ナミュール、ディナン、ヌーシャトー、アルロン、シャルルロワ、テュアン、オーヌ、バンシュ、ニヴェル、トゥルネー、モンスなどである。ベジュケの旅は二種類の感激を求めているのである。その一つは好戦的なもので、城砦があれば登って行き、大砲がとどろくのを聞きたがる。武人の行列が行われれば必ず自分も参加する。これらの行為はドン・キホーテ的、タルタラン的と言ってよい。もう一つは民族・文化的なもので、民俗的な祝典を見物して陽気な群衆を目にすると、そこにスペイン文化を再発見し、「同胞よ！」を連発する。この二つの間にしばしば頭をもたげるのが武勇伝願望であるが、その実ベジュケは臆病であるから、事件に当って目撃者がおれば「強がり」（炭坑見学）、人目がなければ「ほら話」が発生する（猪退治）。最後の訪問地モンスあたりになると夫妻ともに長い旅行で里心がつき、聖ジョルジュの竜退治の行事を見物しても闘牛が思い出されて涙にくれる。そこへバルセロナで共和派の暴動が起きたというニュースが伝わり、ベジュケ夫妻はベルギーをあとにする。

タラスコンの薬剤師ベジュケは「タルタラン三部作」を通じてタルタランの忠実な友であり続ける人物である。タルタランがユングフラウを目前にしてロシア娘への恋によって足止めを食っているのを知って応援隊をくり出したのもベジュケだし、南海の新タラスコンへは先発隊の一員として乗り込み、原住民に捕われていれずみを彫られたりもする。しかし『名うてのベジュケのワロニア旅行』はこのタルタランの腹心を主人公にしたものですらない。「ベジュケ」は「タルタランの甥」と同じく綿名にすぎない。しかもベジュケことセルヴァンテスは実直で大人しいベジュケを通りこしてタルタラン的な振舞いに及ぶ。むしろより直接にドン・キホーテの模倣家であろう。ただ、好戦的である一方において極めて臆病であるところは、袋だたきに会った位ではびくともしない騎士ドン・キホーテよりはタルタランに近い。もっともこのセルヴァンテス＝ドン・キホーテは武者修行を敢行するのではない。サンチョ係の夫人を伴ってベルギーを旅するのである。しかし意外にもこの旅はドン・キホーテの遍歴と

似ている点があるとも言える。失なわれた騎士道の世界を求めてさまようドン・キホーテと同じく、今は失なわれた強国スペインの残像を求めてベルギーのフロニア地方の町をベジュケは歴訪するのである。作者は他の著作からもワロン文化の支援家であるらしく思われるが、『名うてのベジュケのフロニア旅行』では必ずしもワロン対フラマンの対立を主題にしているわけではない。結末が示すようにスペインは政治的危機を迎えつつあり、ベジュケはかつてのスペインの支配地に古き良き日を見出しに行ったのであろう。

ベジュケ・セルヴァンテスはなるほどタルタランに似ている。猪を仕とめたにせの武勇伝が堂々とまかり通るところは『タルタランの大冒険』のライオン狩りを思い出させる。しかしタルタランにとってベルギーは「鬼門」であったはずである。タルタランをタラスコン市民ごとまんまとだまして破産させた自称モンス公爵はベルギー人であったからだ。この詐欺漢は、無邪気な南方の嘘に対して冷たく悪質な北方の嘘を擬人化したものに外ならない。その出身地ベルギーをタルタラン的スペイン人が「わが同胞よ！」を連発しながら旅するのは、『名うてのベジュケのフロニア旅行』は『タルタランの大冒険』の模作の中での奇異な一篇であるが、作品中でベルギーを「中傷」したドーデとこの国を模作において和解させようとしたとしか思えないのである。

#### 注

- (1) Armand Flourens: *Tartarin s'en va-t-en guerre, roman héroï-comique vécu*. Les Argonautes, 1919, 92 p. Imp. Niort.
- (2) Dr. Pierre Pansier: *Li Memòri de Tartarin (Les mémoires de Tartarin, trad. française par m<sup>me</sup> Fernande Pansier)*. Avignon, Roumanille, 1920, xxv-245 p (Trad, 123 p).
- (3) Maxime Rasteil: *Tartarins d'Auvergne, roman d'aventures*, Paris, E. Figuière, 1926, 279 p.
- (4) Marius Jouveau: *Le Fils de Tartarin*, 20 p. 1906年初演.
- (5) Louis de Soudak: *Tartarin fils en Russie*, Paris, Sansot, 1905, 278 p.
- (6) Pierre Durandal: *Un Neveu de Tartarin*, Paris, Sté française d'imp et de libr, 1914, 124 p.
- (7) Jules Sottiaux: *L'Illustre Bézuquet en Wallonie*, Louvain, Paris, Milan: Ed.

Rex, 1932, 223 p.

— 文学部教授 —